塩の道案内資料

「遠州相良から掛川へ」

相良町大原　塩の道起点

○製塩と塩の道

日本の塩は、古くから海塩に頼っていた。中世には揚浜式の塩田が現れ、近世(江戸時代)になると、製塩能率を高めた入浜式の塩田が始められた。そして、沿岸部からは内陸部へ塩や海産物を馬や牛に積んで運び、内陸部からは、内陸の産物を沿岸部に運ぶ交易が行われた。その道を「塩の道」とよび、全国に見られる。

中部地方では、信州に入る塩は、太平洋岸からの「南塩」、日本海岸からの「北塩」があり、９つのルートがある。その内、三河湾では入浜式の製塩が行われ、「三河・足助ルート」で中馬によって信州に運ばれた。

駿河湾では、蒲原や相良などで揚浜式の製塩が行われ、相良からは掛川・秋葉山、青崩峠、高遠、杖突峠を越え、諏訪・岡谷方面に送られた。

相良町大原を起点とする塩の道は、信州街道とも言われ、諏訪まで５０里の道のりである。

江戸時代初めには相良産の塩や海産物が信州に運ばれたが、江戸時代中期以降は、入浜式の瀬戸内塩業地の発展に伴い、船で相良港へ運ばれた瀬戸内産の塩が大部分となり、相良の塩は少量であった。

信州からは、米、麦、たばこ、掛川近辺からは茶が運ばれ、相良港から全国各地に搬出された。

＊揚浜式塩田…砂が敷いてある塩田に、**人力で海水をくみ上げて**かけ、水分を蒸発させ、塩の付着した砂を集めて、沼井に入れる。海水で砂に付いた塩分を溶かし、濃い塩水をつくる。それを煮詰めて塩をつくる。

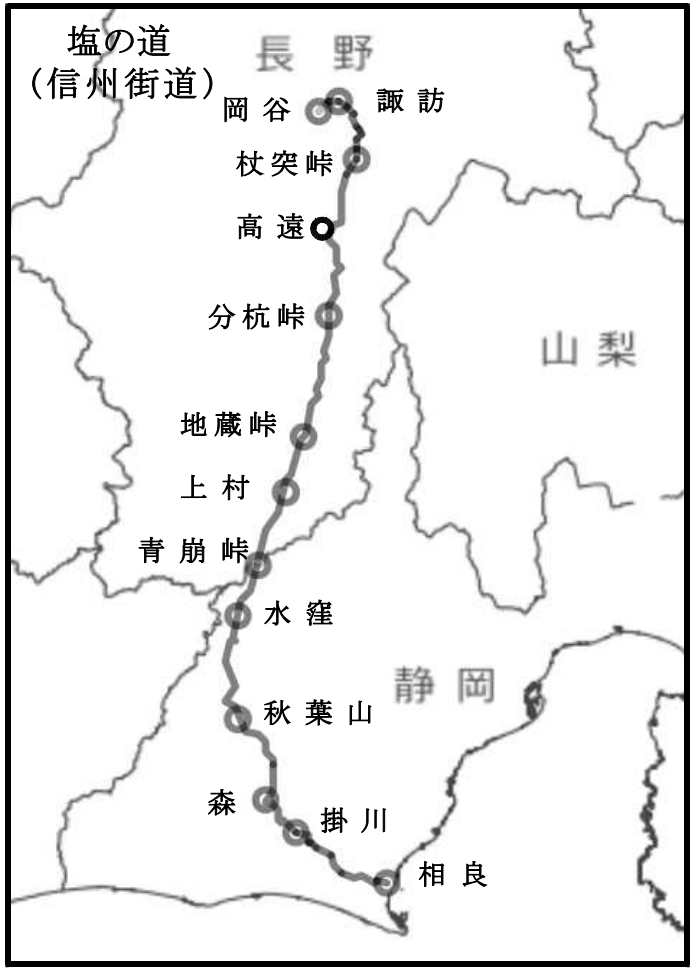
＊入浜式塩田…人力で海水をくみ上げることはせず、**塩の干満の差を利用して海水を引き入れ**、毛細管現象により砂に海水を湿らせ、同様に蒸発させる。後は揚浜式と同様。労力を減らし、製塩の能率を上げることができた。

○塩の道と秋葉街道

東海道を下って掛川から秋葉山参詣を目指す道を秋葉街道と呼ばれるが、相良から掛川を通る塩の道(信州街道)は、掛川からは秋葉街道とも重なっている。

掛川から秋葉山までの案内は「秋葉街道案内資料Ⅳ」を参照してほしい。本案内資料では、塩の道(信州街道)の内、相良(大原)から掛川(大池)までの約２８．５ｋｍを案内をする。

＊本案内資料の掲載地図は、**国土地理院電子地形図(タイル)**を使用しています。
＊本案内資料は、**ＨＰ「遠州の街道を歩こう」**にも掲載しています。



○参考文献等　静岡県歴史の道　秋葉街道　　静岡県教育委員会
秘境はるか　塩の道　秋葉街道　　有賀　競・野中賢三
塩の道起点「相良塩づくり物語」　静岡県相良町　川原崎次郎
塩の道ウォーキング　静岡新聞
東海展望　昭和４３　３～１０月号
百年前の秋葉道　　榛原町教育委員会
塩の道今昔物語　　小林佳弘　ほか現地説明板・パンフレット等

作　成　　令和２年１１月１日
浜松市浜北区寺島８１６　　太　田　　隆　雄
ＴＥＬ：０５３－５８７－３０６３　Email: wbs15437@mail. wbs. ne. jp

塩の道(相良から掛川へ)の道筋

塩の道　　消滅・不通の塩の道

1　相良城

相良城は、戦国時代から江戸時代にかけて、平地に築かれた城で、新旧の城があった。古城は、天正２年（１５７４）高天神城を降した武田勝頼が、兵糧を高天神城に入れるために築城した。

徳川家康は天正１０年遠州を制圧すると、しばしば相良に訪れ、兵糧用の塩を集める塩狩りをし、天正１４年(１５８６）には、廃城になった古城に別荘の相良御殿を建てて、鷹狩りの拠点とした。

そして文禄４年（１５９５)、家康は相良に塩の竈場を築かせ、塩産業の繁栄を願って荒神社(竈の神)を勧請した。現在は大和神社に合祀されている。

相良新城は、宝暦８年(１７５８）**田沼意次**が一万石の相良藩主となり、その後側用人に栄達、二万石に加増されて築城を許され、安永９年(１７８０）に完成した。しかし、老中失脚後、城は破壊されたが、「**仙台河岸**」という築城の時に仙台藩主が寄進した石垣が現存している。仙台河岸が構築された頃から、江戸末期には相良港は全盛をきわめ、中遠の諸大名の年貢米や各地の産物などが、江戸に向けて船積みされた。

また、二の丸の土塁のクロマツも現存する。(牧之原市天然記念物)

2　塩の道起点・秋葉山常夜灯

相良城の北西の見付、東海道金谷に通じる金谷往還と交差する地点(大原)に、飯津佐和乃神社の御旅所があり、秋葉山常夜灯がある。

この地点が塩の道(信州街道)の起点となっている。かつてはこの地点の信州街道は、約２ｍの道幅で西に向かっていた。現在は１７ｍに拡幅され、御旅所も常夜灯も南に移されている。

秋葉山常夜灯は、かつては砂岩・凝灰岩の常夜灯で、正面中央下には、御影石に「秋葉燈」の文字が刻まれ、はめ込まれていた。現在の物は昭和６１年５月に再建された物である。相良町の「塩の道起点」の標識も建てられている。

3　小田宮神社

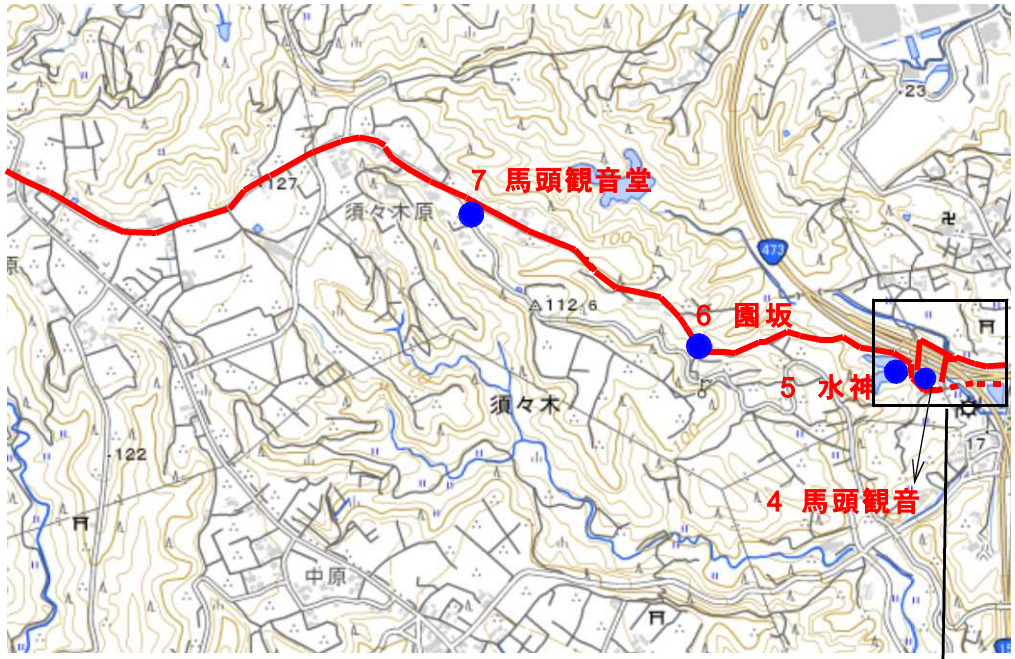
大沢公園の一角にある園村の義人**紅林次郎右衛門**が合祀されている神社で、土地の人たちは「小田宮さま」と呼び、強い信仰を寄せている。

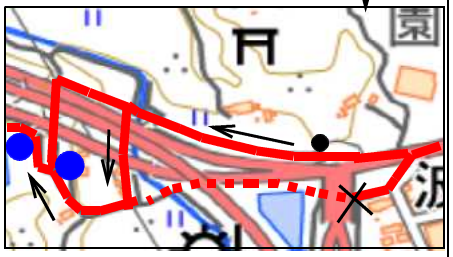
昔、大原から園村は、毎年水不足で不作・凶作に悩まされていた。次郎右衛門は郷川をせき止め、隧道を掘って水を引き入れることに私財を投じ、村を困窮から救ったが、水が注いでいた須々木村から訴えられ、捕らわれて獄死したという。後の世の人たちが次郎右衛門を神として祀ったものだという。

紅林家は代々小田宮の社家であり、小田宮は大化の改新以前の創建で、次郎右衛門は、中世になってからこの神社に合祀されたという。

社の隣に「小田水神」の石柱があり、「大正七年五月　田中儀一郎　立之」と刻まれている。

塩の道は園坂に向かって進むが、高架橋により寸断されているため。高架橋の北側を迂回し、高架橋をくぐって園坂に至る。**＜次ページの地図参照＞**





高架橋に沿って迂回すると、右手に**天の川遺跡**の説明板●がある。弥生時代から鎌倉時代(約１８００～７００年前)にかけての遺跡で道路工事に伴う発掘調査で竪穴式住居跡など集落跡が見つかった。

４　馬頭観音

高架橋をくぐって園坂の登り口の田久家の畑に、馬頭観音が新しく建て替えられている。向かって右の光背に「馬頭観音」左に「大正十三年三月」と刻まれ、馬頭の周りが黒く色づけされている。

以前の観音には、右に「大正十三年」左に「七月五日死」と刻まれていた。

愛馬を亡くした田久重蔵氏が悲しみ、供養のために建立したという。重蔵は、荷を乗せた大八車を馬に曳かせ、園坂を登り降りした馬方であったという。

５　水神

園坂を登り始めた所に、「水神」と刻んだ自然石が置かれている。裏には、建立年は不明だが「九月建之」「発起人　当村　長野宇右衛門　世話人　森田新六(他５名の名)　里鍬棟梁(２名の名)」が刻まれている。

現在、付近にはため池や灌漑用水があるが、昔は水不足や不作で苦しみ、水が涸れないよう水神を祀ったものと思われる。

傍らにコンクリート造りで「記念立樋(たてひ)竣□」の石碑が建てられている。
(立樋…ため池から灌漑用の水を水路に流す装置)

６　園坂

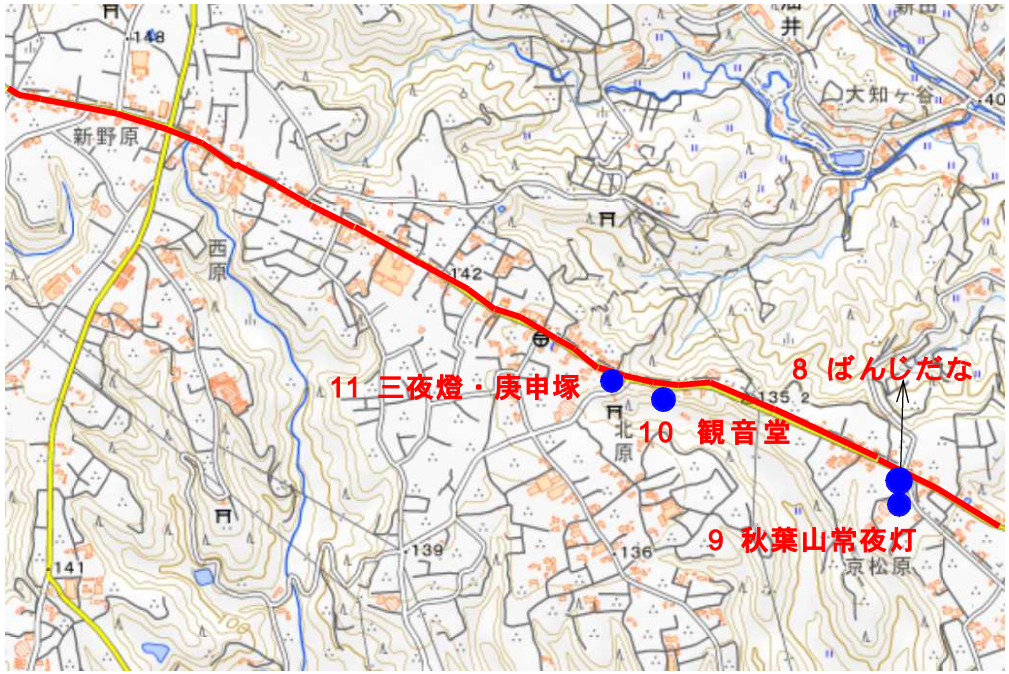
牧之原台地の上まで曲がりくねった最初の難所、急勾配の坂道である。約１ｋｍで、須々木原に至る。現在は舗装されているが、明治３０年ころまでは荷馬車の往来もできない道で、ぼてぶりとよばれた運送人夫や馬の背によって、塩も魚も台地の上まで運ばれた。坂の途中、茶畑や相良の海が望めるよい景色が見える。

７　馬頭観音堂

須々木原を進むと、三叉路に「馬頭観世音菩薩」と掲げられた観音堂がある。馬頭観音の光背に「文化十年酉八月」と刻まれている。急坂を往来した馬を供養したのだろうか、旅人も道中の安全を祈ったことだろうと思われる。

堂の交差点に、大正１２年１月に大沢青年団により建立された道標がある。「地獄澤ヲ経テ平川ニ至ル」「相良ヲ経テ川崎ニ至ル」「相良ヲ経テ地頭方ニ至ル」とある。

昔、須々木原に笠松という巨木があり、平賀源内が隠棲した所との説がある。



8　ばんじだな(伴次郎店)

須々木原から京松原へ進むと、鬼女新田に通じる道との交差点左手に、「ばんじだな」と呼ばれる茶店があった。宝暦(１７５１～１８３０)から文政頃まで伴次郎を名乗っていたため、その名で呼ばれた。

ここは、相良方面からのぼてぶりや馬方が運ぶ塩や魚などの荷継ぎ場であった。現在の中島氏宅である。

南にある**鬼女新田**には、地名の由来についての伝説がある。

江戸時代の中頃か、須々木村から移住した人たちが田畑を開墾したばかりの時、役人が年貢を取るための検地をしにやってきた。検地をされ年貢を取られたら生きていけないと人々が困っていたところ、一人の娘が飛んできて、役人に向かって気丈な振る舞いをし、役人を追い返してしまった。それで「気丈」が「鬼女」になって、ここを鬼女新田と呼ぶようになったという。

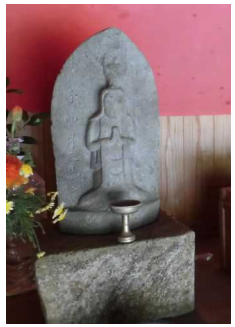
9　秋葉山常夜灯

「ばんじだな」の南に、平成４年に建て替えられた常夜灯である。扉の上に「秋葉堂京松原」の額が掲げられている。堂の中に秋葉神社の神札が祀られている。

１０　観音堂

ばんじだなから７０ｍ程進むと、左手に２体の観音を祀る観音堂がある。右の観音の光背には、「西国廿四番中山」「文政十三庚寅三月吉日」台座に「施主文左衛門(他２名)」と刻まれている。西国三十三観音霊場を写した札所である。

左の馬頭観音の光背には「天保十年亥　四月三日」と刻まれている。



１１　三夜燈・庚申塚

バス停留所のある北原の三叉路に、三夜燈と庚申塚が柵の中に並んで建てられている。以前は共に分解されて置かれていたが、現在は復元されている

三夜燈は柱に「三夜燈」「明治九子三月吉日」と刻まれている。

「庚申塚」は建立年月が判読できないが、右に「慶応二丙寅年九月造立之」左に「講中」と刻まれているという。

左に進むと、疫病除けの素戔嗚尊(牛頭天王)を祀る津島神社がある。

塩の道を進み、郵便局を過ぎると左手の小さな建物の裏に浅間神社の祠がある。